

映画《私は、マリア・カラス》

20世紀最高のDIVA(歌姫)の 新たな「告白」



【映画情報】

「私は、マリア・カラス」

監督:トム・ヴォルフ
 出演:マリア・カラス
 朗読:ファニー・アルダン
 配給:ギャガ(2017年/フランス)114分
 (C)2017 - Eléphant Doc - Petit Dragon -
 Unbeldi Productions - France 3 Cinéma
 TOHOシネマズ シャンテ、
 Bunkamuraル・シネマほか
 全国順次公開中!

劇中の50%以上が「初公開」
 今までにない視点の記録映画

没後41年を経てもなお、オペラ・ファンを捉えて離さない不世出のソプラノ、マリア・カラス。その波瀾に満ちたライフ&アートはこれまでも幾度となく劇場やテレビでドラマ化され、舞台や記録映像を集めたドキュメンタリーも公開されるなどしてコンプリートされたかに思えたが、ここに至って新たな発見があった。ロシア生まれ、フランス育ちのジャーナリスト系監督トム・ヴォルフが3年にわたるリサーチによって、彼女の未完の自叙伝やこれまで封印されてきたプライベートな手紙や秘蔵映像・音源などを入手。それらを元に、今までに無かった新しい視点の記録映画《私は、マリア・カラス》を完成させたのだ。実に劇中の50%以上が「初公開」。素材という衝撃。始まってすぐに登場する《蝶々夫人》のカラーによる舞台映像からマリアの目は釘付けだ。自宅や友人の家でリラックスする素顔や豪華クルーズを楽しむ姿はもちろん、1965年3月に

6年振りにメトロポリタン歌劇場に復帰して《トスカ》を歌った時のバックステージや客席から見た舞台姿など、貴重な「初出し」が盛り沢山。Blu-rayで市販されている1958年パリ・デビューのガラ・コンサートや1962年&1964年の英国王立歌劇場でのステージも鮮明なHDクオリティのカラー映像でスクリーンに映し出される。

全編がカラス本人の言葉だけ
 悲劇的な晩年に意外な新事実

しかも、本作の真価はそれだけではない。自叙伝や未公開の手紙の中に遺されたテキストを、2002年の映画《永遠のマリア・カラス》(フランコ・ゼフィレリ監督)でカラス役を好演したフランス人女優のファニー・アルダンが命を吹き込むようにして朗読。加えて1970年12月に人気番組司会者のデビッド・フロストがニューヨークで行ったロングインタビュー(※当時の放送以来、40年振りに発見されての再公開)の肉声がふんだんに散りばめられ、全編がカラス本人の言葉だけで綴られた「真実の告白」で構成されている点こそ、監督が今回成し遂げた、最大の功績だ。特に注目すべきは終盤あたりで描かれている、これまでスキャンダルかつ悲劇的に語られてきたギリシャの大富豪オナシスとの関係についての意外な新事実である。コアなファンにとっては当然の必観映画であることは今さら言うまでもないが、プロフェッショナルとして信念を貫き通し、愛を切望するひとりの女性として、苦悩しながらも全てを受け入れようとして変化していくその姿は、観る者全ての心を掴むに違いない!

【東端哲也】